かの浅みん草

上

伊地知文庫
文庫20
119
1

ゆきし路は

伊地知氏書冊

早稲田文庫

文庫20
119
1

めしけれは

楽しと以ハ雁も外山の氣示
はるん

年月よりをこえて姫ゆ

春の来る庭は枝折や朝霞

神代よりかくや幸き四方の春

子日

いやまさる千代をかさぬる色之根の春

春雨

時を得て咲やは花も神乃庭

清きりの覆か常し神の森

伊地知氏書冊

一 神慮すゝしき梅の古枝々

一 古ゝろしまつ和哥の神乃梅

西光寺
天満宮奉納

一 松梅も時にあふや神乃庭

小飛見村
友郎し

一 梅咲て一しほ年の井垣哉

大嶋の神社中ゝ

一 神の庭すゝしき代や花に

中くら
水沢村
白山大権現奉納

一 あゝ今世ハ実久しよの春乃月

一 神慮清きなかれや佐穣川

一 かみ垣の春やこゝろの世ゝの旅

水沫村
白山大権現奉納

一 あら世ハ実久しよの春の月

一 神宮へ清まさるや出穂月

一 かみ垣の森やことさらの世ゝの嫁

一 安国や万代かけて里神楽

さ家の花ゝ

一 花曇の外にや雲も春の月

一 雨後も社梅咲く春の夕月夜

一 黄鳥の声より明る朝戸かな

一 忍よ晴て一海夕月の形

花

一 遠山やたな霞の曙春かすみ

一 錦とやきそめし乙春の花柳

一 池水に福千や花の朝くらへ

白雪やちらしかゝる岸の花

宇佐英勝俊併ゆく

花も手に手てあかぬ人の夕かな

おなしく

若林氏六七の祝勧進

若枝も柏いつまでの栄子

大塚直恒ぬしの祝

年の葉乃万代の松つもる水

其阿上人六十賀

千の葉乃花の盛やみよの春

おなしく

方義新宅にゆく

住人来て将に栄る家の風

安陳六十賀

三世や手の孫長き岩柳

毅忠六七の祝

十かへりの松も三世へ千代の春

外海府にて以て新白

終に来て行もゆかりも中家の風
安陳六十賀人
ミとせや寿の陸長え岩柳

穀忠六十七の祝

ー十かへりの松もミ世へ今年の春
外海府も以て祝ふ
其の作もよし幾かて告る折から

ー天の戸や安く越行春の風
同し所へ入門付ゆく
人丸の肖影をおくられしく

浦和や富かくも上行朝かすミ
ゆかりく
同しく寒村百寿を祝ひて
新宅ゆく

春毎にさかりを見よ人もさも上家が櫻
なりる
副光見妾一七りま

ー咲程や夏ふくり明康春の花

柳

春風や姿ととのふ柳

水晴てしらぬ流るゝ柳かな

春風の吉凶邪正柳かな

夢の旅て胡風なくし柳かな

ならうよめる

梅翁大明神法楽

春霞尋てぬこのこ垣ふる

浅見常云八十八歳作

花薪きつて駒も年ふるの春

若林玄意又七十の賀人勧進

世ぞ春の盛りハ年り　梅林

菅宋福寿翁の庭

春来ねて花ハ咲ぬ木の梢かな

方義友蓮

折よあひぬ花ハ常の四月乃春

世に春の盛りなりけり梅林
茂木福政女の廼

一 春なれや花ハはなの木の櫻ト
方義友嗹

〃 折よくあひぬ花営の世阿乃春
中川雉新 姫子従も孫子

一 花鳥もまつの心や君の友
岡田滋明一兄了

一 花の春を世々に咲はけ家の風
上巳

一 汐くもよいさ西向ふ子の代子
櫻の日くよ

〃 雲路子咲かすまゝ自ら櫻ノ飛

〃 明石やめのおはきの山さくら

〃 櫻つ大初く奥ある山路ト
百山

行春の形見のやうな遅桜

白雲とみしやさ月の山桜

きのふとも思はぬ春や遅桜

よしい

好睦七十賀翁を

若緑やかくれの老の松の露

井氏洗恭が母子なかしを

とふらひて

たゝ木とみしや後葉の露

躑躅

稀りや夕ミろのはなれ行し

義知亭作

橘袖や以わせうきさも残芝升

三月廿九日雅園追行

春よまてゝその葉桜も花の宿

葉には夏ぞ神の松としての縁

陽炎をとなびかりしと本書し

宗匠道印をはしめ櫻の行歌

梅柳やよめせうとまもり　芝升

三月廿九日雅園巡行

一 花よまてここの華見に嵐の宿

芭蕉翁の桜といへるは
隅田川をわたりしと申せし
宗匠道彦をはしめ桜の所縁
を送らせを語ふ代々日ゝ築せ
よしめる

一 本意もとふ人かりや梅の　之一

更衣

花の香や袂に薄き更衣
少みく

補書をと笑しおるよ

一 信雲やかこと斗の渡しは　圭阪

五月廿四

一 郭公第一声を求めてもおそし

勝俊二吟

将則もゝの楽志なり庭の松

交りも出形て庵の芽下

存月叟

菖蒲

川あやめ袖もしほるゝ白帆かな

眼斎楊行主

海原やうきめ涼し夜波の月

大顔寺 長行

庵の枝乃素丈を作の心かな

陸徳之以了

下もの葉涼く清し蓮

古法眼昌通 進居

橋の名を忘のつゝ昔かな

少稜

大庵やとまり涼しき川原風

牡丹

夕露残はなの限りや大牡丹

観蓮といふ了人子ありて

汐稜

大風やとまり涼しき川風

牡丹

夕露の我はかりの限りや大牡丹
観蓮とこそ人まさく

云ひ葉の毛や世をもつ名ある牡丹
郭公の粉も牡丹ともし
請りしくすかく与千

人待も年も初音上二度の牡丹
下野くまち侭待つ人

人待あまくしい牡丹の郭に
杜宇我韻すて

ゆや昼夢二股ぬまぬ覚え牡丹
ゆらい

横雨の雲や安きを牡丹郭に

気の雨の雲す太年あり郭に
きよみ

端午

一 手に白くあやめをふく影の風

方義拝して探題祝

一 千代の春世々や源氏岩根松

白き梅に偶生

一 車前草や京のみやこに見ぬ宮の庭

赤き梅に偶生

一 雛守りの家浅き軒端垣根に

蛍

一 玉かつら玉ちる露の宵闇に

一 晴るる野の中川面白の星に花蛍

一 川水にしらり浅流す蛍かな

夏樹陰

一 涼しさや森を隣の松の風

出ぐ

山本村一六年此駒睦のに

みよみよしかのをしはさ(?)き

来つるよりは紅の初子(?)

から(?)

し 涼しさや森を膝の松の風
夏旅楼
おんぶ

山本甚五八年比駒睦のうく
みよれいかゞしてみさつき
来つゝきより旦領初子係を
らん我ぬしつさりて経
まゝよそそうにも世を早く
まし来を慕て仕りく
し 森やしみて萩長僧来二葉
生平らて延りて
し 二つ蝶の子さ頃世の夕の作
し 世々題
月間しきし山々つや成きし
吉甚五下迄り
米み角の花はれ底居の名
そろゝ人の三へ百直頂を
あ任し仕りて
し 飛ぶ月とは尽みの光の形
雅園して夏丹の題を揮て

一 夏草は花の露まつ夕かな
岸本氏東の都へ上る時
をたにとさきたまりて
一 羽ゝ見よ末頼しき庭に
同しく錦の後を早く後さ
経てと殊りて
一 吹送る船路すゝしき夕の風
夏月
一 影涼しなか流水の夕月影
少将常忠毎七忌
一 蓮葉や打袖ぬらし花の露
法手の母年忌子
一 河波の舟や涼し土小夜神楽
忠和拔
一 吹おろす夕風すゝし古稀川
採よちつ作るみよある

吹かへし又風すゝし大堰川

秋立ける日よめる

風寒み一葉を秋の始なれ

初秋

秋風の音をとゝける一葉かな

秋聲

引袖の桐風白露飛ふ影

虫の音もあはれ花野の夕かな

吹風の音もあはれ村すゝき

方等坊一七

明烏の声もしぬかの名残哉

恵善院二十年七月の忌に

偲りし世や思子寝る袖の露

雁

来る雁や雲に森ある夫の空

秋風のうき重ねて雲井下

頓蓮和尚旅行家雁にて

雁渡る波路の中に舟出下

副元方義三唯

夕霧にきこへ雲の旅枕下

言ふ霜宣哭ぬてのこゑよ

下遊の旅ろやみ入初まち

大神宮年月

さゝ波やさしき森すむ旅の月

三石良

世をまた名にや理りの旅の月

秋なてそみて月かな旅を坐下

名や涼暑らぬ代の旅の月

月しまに西ゆりに枕い

村雲の夕雨にも石や六角月

世の中の名や理りの跡乃月
秋まてみし月いく夜をと思ひけり
三五夜

名や洩れらぬ代々の跡の月
周しまて雨すゝきぬれは
村雲のよそにそ名やそらす秋月
思ひおも名や思ひかくさぬ三五秋月
宗端
てつ年の光りや風さす草木の露
春納
もらち芒ひやさ兆にぬきや下
瑞籬の久しく白く殊の哉人
松間松
村雲のさても深し下紅葉
村松乃よそのよそ乃松乃那
十三夜
名ましくる月の桂乃紅葉下

白き萩の絵に

一 露越て尾花は散る朱雀

一 少萩すゝき花侭野子の来子宿

一 露やとこ小牛毛はゝ拾相ぬ

保沢来芝又千七日忌

一 給もや古こ毋子艸引露

俳諧の古かゝると

一 秋引せや広芋ゝ哉虫の声

一 露数く虫の声よ冬き石の葉々

一 秋霖の毛やこ掛る虫の声

七夕

一 潮に割ふ水をき〻留よ銀河

七月十五日祇園会

一 柳ちる萩子風吹く夕ぬ哉

百也

一 露はへつる落葉の夜の椿

棠

名木の紅葉

一 涼しさや湖水さゝ四五上ら浪ほ

七月十七日祇園にて

一 柳ちる花より萩子風吹く夕かな

百之

棠

一 香はさへつる鶯の音に待

名残の紅葉

一 残の雪て紅ひし梅もちち

一 深雨ふるや櫻の落葉

けふ降て雪ん

五月蒼師の東乃都へ

赴きけるを送りける人達

の人々手をとりいはれて

思ひ出てらん世やかゝの雲の月

同しく江戸東の藤やてゝ、両家

よって居られ候哉、猶思ひ候

名しあるやらん花の松

同し新たなる桜をけ

右は十七日に

袖の露

中山一菜好修へ送る

もの手や近ヶ付する君の菓

同しく清り経紙の序まて

身ましあはぬ文の塚稼の花乃旅

武蔵山東傳寺和尚の七旦忌に

言未加へて送る

〃 世をとよみし世を出て旅の月

四壁千句ホ七月

〃 久方のひかりやうつす旅乃月

今井方故へ候ホ

〃 名月見ん年毛さく七河の菓

初冬

〃 冠を枝外面見せて神無月

左甫

〃 神垣や冬枯のたえ所一本松

福公云

〃 且の在見てみて聞の其の郎

初冬

寒き椀外面をあく神無月

本間

神垣や宮林の外は一本松

稲公之

玉の座みゝ額の井ゟ那

都万侯宮十七年乃出字

めくり来て御神めに清面下

懐旧

世ゝやや偲見て雲の尽

旅

行水の岸さへたゝくと山ル

湊原忠形富士の高居へ流し

かゝし夏是杖けと空れ待り

夕形人

神宮作らいてゝし梅の雪

能山を年侍して

山松や清の上ル十かへの之

暮秋

一 風ときゝし木の葉にちる秋は猶
　白露は霜に結て

一 積りゆくもみぢは松の雪
　とし跡尾花に

一 暮月て行年波早き川瀬かな
　光久

一 書路て暦に惜む一月の秋

類ひなや安ら明月の夜

一 吉野山の毛咲たる跡の花落すとし

額ハやいまて明石の道

〽寺山の毛をくはせの葉すゝき

世深の月かたさゝぬ波乃上

〽汀乃さゝ原風ぞ夜寒

衣乃袖さハ妹の夕部はかなし

〽忘れて跡の木の本乃杉葉

雲よの流と花の山尾

〽折居も湖間の奥をとひゝ

時雨秋千の袖のうへも雨かよめ

〽もゝちぬ松も同し難面さ

うきさを厭ふも方さへ定

〽名たゝなるや袖の紅葉ん

此みゝく

有明月をいてゝ毛つえ

格

花のほかは旅秋限りしら波
　こよし此の里ハ宇まれ君

格佳

鹿よちる我金雁の声
　波の下よく月も宿かな

格

風流で尾花に赤の木の実哉
　ちてく

格

大空のまゝ行燕や残
　春風の後をとられ松陣井

格

梅咲て一しほ赤の井垣
　まりのてハ子手の仟世き
　眼拝たてく

格

年ことの後乃影を占ふ
　世の乃名残を恋し子を捨
　留行の陣やかで也あり

格

人あり千代乃夢も見る
　まつしく

格

旅の空と来し苦や甘ら
　我の子かく旅雲の峠星

化し世を思ハ旅くりかへし

〃 世の白浪を恐ず人の花
笛竹の細くや細て夜見ん
樗 〃 人あらず今日人あるかわり
ましく

旅ゆき来し夢や妻子に逢ふ
樗 〃 我の子かく床雪の峠星 あ野
化し世と思へは仮りし露ハ
亦 〃 花蕨あるの面影星の春
うらら雨は白雨ふり
亦 〃 年々の子を秋似る旅出て
さゆへて後ま世夢の面影
友 〃 有明の清き嵐く物き枕
夏来ハ守ること十五六早明
亦 〃 浅くハ白雲のあつさなき男
中々く
移し斗の上かり下ら
樗 〃 帰りさを忘るゝ花の木下かげ
志りしを社見る梅とあらハ
此所白名誉の秀逸なるへし

西行は柳陰にありし昼寝さし

〃 秋の夜や月と世にして千

山陰の庵よ志て庵寺く

らも秋の心やかくと契る也

〃 月より脇作を志る遠里

行くと静の稍なくらん

〃 梓弓の行末をぬ秋の形よ

是非も月の舟をちまし

〃 月落氏人の庵むかしの筆よ

其外分るまゝ見無いはなり

〃 蛙なく井出の玉川氷清で

行く水と梅見て月は世にら

〃 かくとの衣一筆の　安し

かく斗跡面きくへ頼まで

〃 年に梅とかく花はしまま

出の

〃
但しれと梅見ゝ月は生ける

〃
かゝらの衣一筆の安と

かゝ斗語尾さへも類まで

〃
手に嫁せかゝる庭に出来ず

八峯山も一際也けり夏木立

〃 俗代
らの茶屋風も月すゝめ成庵

見添玉葉子流落かな

〃
旅人のあゆみ松かげ作文者

神の恵みの涼きたちまちて

〃 茶
袖子さ年たてかさね和らて来東

宋稚も嵐ぬ世出て往 良斎

〃 茶
あしの苗子等を寄せたり

〃 茶
竹をはしらと植む千那庵

赤
「
移しまも分て露の浮さ
晴曇る片破月を袖にみて
かへらぬ事を何思ふらん

赤
〃
香能書の調ハ西のゆかた
形添ふ人のこゝろ之ゆか

赤
〃
天地の恵てハあるかし世中に
乃ち我人ハ同し姿に頼もしく

赤
〃
志る夜の春なく夕暮の山

赤
〃
飛とたな原尾上や雲に迷ふ人
霧の初りし清みぬる

赤
〃
哀しき柳に秋のあはれ見えて
縁年を十日そ行ら

赤
〃
小千歳の家吹払ふ松風に
例て好く越尾の藤ありき山ハ浪出ても藤可添ふ
谷の梅の花しハ香をき世渡り

赤
〃

霞ゝふる柳よ秋のまつ月へるへて
縁年を十ゝそ行居

参 〃 小半哉の雨吹揃ふ相風よ
何を好ミ起居の前ならき山ハ夜半やさき前を参ル也
谷の梅の籾しハさき世傍よ

参 〃 清よ半て季の木をすさし
ゆる
すあハ行ゝ奥の山路しと

参 〃 大宗や炭屋へ網ゝをつへて
手子振拜世の背思ゝまて

参 〃 三種の食ゝ伴ゝ来て出まり
いつよゝ出宗好引孫あつ

参 〃 枝さへたつきさゝ衣の松
夏来よ作し幸海の色

参 〃 みし草の記ゑよ誂ゞ添て

東路ハ恵信さへ香かく

花
〃
猿しあ手らす笠坂の笠

栄
〃
菊さへ枝す咲す一丈非
ゆかん

梅うつる江の水きく明初て
重之扇子

茶
〃
明渡す入江の柳風見えて
おかし

白浪の立て居ハ身来ぬ

杏
〃
尾はふみ行せきし 雅の花

西北
〃
若竹の二葉す隠す垣根かな

蝶ひらり す十春雨の小庭

又村雨や志くれ行らん

楊
〃
山桜の木の下影夜半の月

我こゝろさき世の中 孫五

楊
〃
花の枝を出る風の音かな

我こゝろさ世の中秋さ丘

精 〃 岩の枝を出度風の身なりけり

〃 一村まんの陰乃（共）木の下まて

〃 芳るゝ（せき）櫻に寄る春もあり

何事もよく名無事中まで生玉ふらん

序 〃 隠家を思ひ出す宇學る

と一度の告信もなし

〃 秋しく虫の声もしは有明と

（むく）遊面見えし車の村さ

〃 桜咲了柳は櫻に染人ゝく

まらしく

精 〃 山松の木のように深き月

又村雨やちこを行らん

星霜堂
政常

右行哥附句等
時々加引墨者也
積心斎
玄川